



TITLE:

赤子の夭折統計観

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 赤子の夭折統計観. 経済論叢 1933, 37(2): 188-206

ISSUE DATE:

1933-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130344>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷七十三第

行發日一月八年八和昭

論叢

相續稅改造の一案……………法學博士 神戸 正雄
利子の資本蓄積に及ぼす作用……………文學博士 高田 保馬
赤子の夭折統計觀……………法學博士 財部 靜治

時論

爲替戰爭と圓爲替の騰貴……………經濟學博士 谷口 吉彦

研究

簿記の目的に就いて……………經濟學士 蛭川 虎三
資本蓄積論……………經濟學士 柴田 敬
信用統制に就いて……………經濟學士 松岡 孝兒

說苑

國家の相續權……………經濟學士 三谷 道麿
所謂『賣上稅』に就いて……………經濟學士 佐伯 玄洞
百貨店と専門店……………經濟學士 堀 新一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（纂轉載）

赤子の夭折統計觀

財 部 靜 治

急驚風。^{キヤウフウ}牙齒^{キバハ}をくひしめ竄視^{ウヘサミツメ}手足^{ビクツキ}搐搦^{ソリカヘリ}或は反張^{キョウツヨク}或は壯熱^{キョウツヨク}或は熱なくて此證を發する者あり、且

大抵、此證を發するときはわつと叫聲^{サケブ}をあげて目を引つくる者あり、併ながら初より壯熱ありて

うとうと昏睡^{ネムリ}聲をあげずに惟手足^{タデ}を搐搦^{サケブ}して後に引つくるもあり、此を急驚風^{キヤウフウ}といふなり 慢驚

風。大抵大病の後或は大便秘利^{クダリ}或は吐乳^{チキモノ}食こと數日の後に俄に昏悶^{ウツトリトナリ}驚搐^{ビクツキ}竄視^{ウツトリトナリ}等の證ありとは

本居宜長と同（一八〇二年に歿したる。名醫法眼丹波安元元惠が、その寛政元（一七八九）年上刻の著

「廣惠濟急方」中に説く所なり、而して急慢驚風に對する處方として、幾多の散湯又丸藥を擧ぐる

中に、慢驚風を治する主方「加味和中湯」として、人參白木^{ヒヤクジユツ}（各一匁）茯苓^{フクレウ}、陳皮、全蝎^{センケイ}（各五分）細辛

（三分）薄荷、甘艸^{カンサウ}（各二分） 右姜棗入水煎乳母^{オチ}にも用ゆべしとは、享保十（一七二五）年の序を附する

蘆桂洲著「袖珍醫便大成」中に説く所なり、斯くの如きは本邦新進の醫學者により、陳套否無用の

立說視さるゝやを知らずと雖も、ヒキツケ Convulsions が特に夏季に際し幾多愛兒の生命を、咄

嗟にして奪ふの症狀たり、ためにその命且夕を計らざるの狀あること、晩春雨後の筈が間引かれ

行くに似たるは、今も昔と異なるなし、而も亦移植されてより未だ幾何の世紀を経ずと想はるる江南竹の筍は、城州乙訓郡をして一名産地の名を恣まにせしむと雖も、全國諸大都市（人口十萬以上昭和五年の現勢）二一中最大率の赤子死亡を示せる金澤市をして、（昭和五年日本帝國人口動態統計記述編九〇頁參照）世界健康都市の名聲を舉げしむるなし。知識界に於ける東西洋既拓又未開の分野を探る點に於て、本邦自然科學が幾糶の高空を飛ぶとすべきや、之を判するは素より吾人の企及し得べき所に非ず雖も、社會統計の古今又東西比較に努むるは、斯學研究に當る者正に當面の責務とすべき所なるを懷ひこの蕪雜なる一編を草す。

三

明謝在杭肇淵の著五雜俎卷五中に曰く、「漢中山王勝有子百二十人、此古今所無之事」と、こは中國一千又一夕の話材とすべき所にして、現代諸國宰相如何に果斷敢行を悦ぶとも、之を理想とするはなかるべし、現に同書中にも説けり、こは王侯之家「足_ル以_ル媿_ル美_ヲ」かためのみ、「士庶膠侍有限、口食不充、多男多累、帝堯已慮之矣と。されど又方今にありても人口増殖のためには子の生れんことを要するのみならず、その子が克く育養せられ又成人すること肝要なり、こは赤子否一般少年少女が、將來社會の中堅たるべき使命を託せらるるために、社會上重視さるべき一面を有すると異なるなし¹⁾。然るに人の子にも夭折の慘なしとせざるは、既に上にもその一片鱗を指摘せり、今先づ問題の理論的方面に就き少しく考察せん。

1) Cf. Fairchild, H. P., Applied Sociology, 1916 pp. 14, 265.

試みに之を一般生物に就きて稽ふるに、一定種の動物は何れの時代にありても、自然が之にその食餌を援くる以上にその數を蕃息する能はず、従ひて諸動物間には古今を通じ、供給限られたる食を我物たらしゆんとして鬭爭絶ゆることなし、一の種動物としてあとより生り出でしも、生存競争に臨みては間もなく果敢なき最後を遂ぐ、そがその兩た親により扶けられつ護られつつあるやは、その種が屈き得たる發展の高さ何合目なるかにより岐る、されど何れにしても宇宙四海の濤は荒し、之を泳ぎ切り得ざるも亦數知れず、人にありてそれを何程とすべきかは以下問題とする所なり、されど畜生にありても尙少し計りは生残り、その種中にてやがて又餓えに泣く勇敗分數となる、食をあさりては同種族の年嵩としてその中に兩親も含まるると喧嘩せんとす、かく觀し來れば動物界に所謂「青^{ライジンダチエネレーション}年」なるものあるやを疑はしむと雖も、²⁾こは動物が賢哲により教導されず本能により否本能の權現視されたる自然に誘はれ、概して個々の保身を計るに急にして種の無窮を疎んずるの致す所なり。實に動物は高等に進むに従ひ、幼年期愈々長きの要を告ぐべきは、進化の周知されたる。一原理なり、別言すれば心的又社會的生物として高級なるに従ひ、同類の完全なる一員に熟成する迄に、その幼若個體の費やすべき年月日は愈々長し、人の子は修養すべきもの最も多きがために獨力の能なき年月も亦最も永し。³⁾

有生者必^レ有死、自然之道也（揚子法言、生涯中萬難を排し得たる人命と雖も、徐ろにその歸を同じうして天則に隨ひその終りを遂ぐるに至る allmählig sich vereinigen mit dem Naturgesetz, welches jedem Menschen ben, auch dem von Gefahren

2) Cf. Fairchild, H. P. Elements of Social Science. 1925 pp. 15, 16.

3) Cf. Cooley, Social Process. 1918 p. 59.

freiesten, seine Grenze setzt -> Transiofer, Statistik. 2. A. S. 142 と言へるこれ、人も亦永遠に此大道を免がれ得ざるものの如し、唯その多少遅速は問題となる、かくて一般死亡率は國民文明の粗大なる一尺度として佳良視せらる、否吾人は一層適切に謂ひ得べし、子の死亡率特に一歳未満なる子の死亡率は、國民の衛生經濟及道德事情の一標識なり、一國民がその子の爲めに盡すべき世話は、同國民性格の一標識と適切に呼はれ得べしと、世界を全般として考ふるに、今尙生れ出でし者の半數は五歳未満にして死すと見積られ、文明國の間にありても、一般に死者總數の四分の一乃至三分の一は一歳未満の死亡に歸し、三分の一乃至約二分の一は満五歳以下の死亡に歸すとせらる、こは莫大なる生命又は活力の浪費なり、苟安する莫れ、諸蠻夷は多子が一の重荷たり、現世の首枷たり、何かの仕方により之を免がるべきことを、その信念としたりと謂ひて、試みに想へ大正十二(一九二三)年の關東震災による死亡に關する保險證券數、男二、三三六女一、一一七計三、四五三たり、(昭和六年發行一九二乃至二七年本邦生命保險の有力會社材料によれる日本經驗生命表附錄五三頁參照) 然るに同年内に於ける本邦内地乳兒死亡總數は、その約百倍即ち三三三、九三〇人たるを、保險會社中には俄然の震災死亡により震懾するものあるをやを知らず雖も、内政の局に當らるる諸賢良は簡單なる右二計數の指摘により、問題の輕重を明辨せらるべきを信じて疑はず、現に大多數文明國に於てさへも、幼者死亡特に赤子の死亡は尙比較的に高し、その子が私生たるため、孤兒となるため、離婚又は遺棄による家庭崩壞のため、兩親が錢稼ぎ又娛樂に夢中なるがためと謂ふが

如く、種々の事由により奮の命を折らるる者特に多きは、後に尙説くべきが如し。⁴⁾ 本邦は古くより親子親あるの實舉り、曾て外人により a paradise of babies (赤子の樂園) と讃稱せられたり、⁵⁾ 雪州の「楠公父子」を待つ迄もなく、親の義死免がれざるを感知すれば、子も亦その旅路を俱にせんとし子の飢餓を視るに忍びざるがために、窮通を「親子心中」の悲慘に求むるの例も珍しからず、育兒に意を用ふること深き結果は、動物凶猛の世界に就きて迄もその模範を搜し、獅子子育ての譬を習風化し得たるは周知の事實なり、之が反映乎昭和二乃至六年の五ヶ年に就き、五歳未満死亡數を察するに、比較的に少くして年々總死亡數に比し、三五乃至三八%たり、(第四十七乃至五十一回日本帝國統計年鑑各通「略説」參照) されどこの死率と雖もその大部分は不必要たり、避けられ得べき所たりとすべきや、數文明國の例に徴して斷じ得べき所なるのみならず、之が推移の跡を繹ね、男女、季節、都鄙、貧富、嫡私出等の別により之を解析し、特に又出生數の多少に照して研究するときは、寒心すべき事實尠からざるを發見すべし。

H. Spencer が生存競争自然淘汰の生物學的理法を、人間界にも推及ぼし、赤子死亡を觀してかかる淘汰作用の一面視せるは有名なるも、こは寧ろ性生活に於ける「末は野山」laissez passer 主義と、冷評すべき所、之を是認すべくんば特に無配偶者の産兒、母親たる獨り女 unmarried mother も亦容赦すべきこととならん、事實上乳兒死亡の原因を擧げて、自然の苛酷を護る『閻魔の使』命(心地觀經) ^{ヂヤウ}定命の自然淘汰的性質を帶ぶとすべきことなし、⁶⁾ されば現今社會研究者衛生學者

4) Cf. Ellwood, Sociology and Modern Social Problems. 1923 pp. 188, 189; Zach, Die Statistik, 1913 S. 69; Towne, Social Problems. 1916 p. 371; Hayes, The Study of Sociology. 6. ed. 1918 p. 181.

5) Cf. Chamberlain, Things Japanese. 5. ed. specially pp. 92, 95.

6) Cf. Elster, A., Art. Säuglingsfürsorge "im Elsters Wörterbuch. 3. A. II. S. 712; Derselbe, Sozialbiologie. 1923 S. 273; G. Temme, Die Sozialen Ursachen

は一般に赤子死亡の低減出來得べくはその絶滅を期するを以て、國民の當然なる責務視す。凡て一大防衛運動振興の第一歩は堅實にして明哲なる公憤パブリックセンチメントを喚起するにあり、赤子存養運動も亦此例に洩るるなし、之がため特に出生數に照せる赤子死亡の双方材料に就き信賴し得べき、叙説を得せしめ、又子の特殊疾病を防ぐの機會を最も敏速に捉へしむべき適當記録を必要とすとは、後に説くが如く人口動態特に出生に關する統計、久しく粗笨の状態を續けたる、北米合衆國の特殊事情に應ずる立説とすべきも、弘く此問題に關し如何に統計を、重んずべきかの大旨を、道破せりとすべきや察するに餘りあり、その外赤子死亡防衛を目的とする諸方策は、近年諸國に講ぜらるる所なり、吾人は大戰前及戰後に亘る獨逸に於て、此問題に關して示されたる推移が、頗る興味深く一般人口學理に關係する所も淺からざるを以て、後段に於て聊か之を取扱ふべきも、今簡單に觸れおきたきはかかる運動を目的とせる團衆行動に就きて然り、即ち佛蘭西は子の死亡數低下を謀るの急先鋒として現はれ、一九〇三年には同題目に關する國際會議召集せられ、一九一一年伯林に開かれし第三回國際會議にありては、二十箇國よりの代表者集まり、同問題は議せられ、統計は蒐集せられ、諸豫防策は決議せられたり、而してかく多くの國より出席を見したため、その討議は廣く傳播せられたり、英に於ても同問題に就き屢々大會議を開催せること傳へらるると共に、米に於ける最初の內國會議は一九〇九年米國醫學院 the American Academy of Medicine 主催の下 New-Heaven に開かれたり、此會議の結果として「米乳兒死亡研究防衛協會」the American

Association for the Study and Prevention of Infant Mortality 組織せらるゝ、その目的とする所(1) 乳兒死亡に付その一切の關係研究(2) 乳兒死亡の諸原因に關する知識の普及(3) その諸防遏法の獎勵にあり、そは國民を教育又啓發し、優れたる衛生組織及行政を鼓舞し、全米健康省の設置唱導に努めつつあり、合衆國政府は近年に至る迄兒女保護のため盡す所多からざりしが、近年聯合政府により設置されたる「兒童局」Children's Bureau は、之を以て重大問題の一つ視し、現に之が研究を初め、弘教育的たり又鮮明に見聞に富める文書を發行し初めたり、そは前記協會と提携して行動し、適當なる注意は恰も此問題に注がれ初めつつあり、一九〇八年米合衆國大統領たり、前記の成行に際會して政局を宰理したる W. H. Taft は言へり、「乳兒死亡低減問題の永遠に傳はるべき要度を、誇張し過ぐるは可能ならず、そは家庭の幸福に影響するのみならず、國民の福祉、人種の將來に影響す」と、特に外來移民に富み又黒色人種を包擁する同國の國情に照せば、統計の詳實に徴する迄もなく、剴切たるを推測せしむ、さればこそ獨逸赤子愛護運動の近年に於ける一急先鋒 Geh. Obermedizinalrat Prof. Dietrich も説けるなれ、「子供の多死は經濟的國民的不幸なり、一つには國民經濟上巨額の價值を、罹災者のための夥しき負擔にあつため年々空しく作出して又倉卒に滅失せしむるために然り、二つには子供多子の原因が同時に生き残れる乳兒の抵抗力を殺き、國民の力をその孫裔に及ぶ迄弱むるがために然り」と、本邦に關し Chamberlain は前引用書中説き得たり、醫界の諸大家は日本在留歐人種の兒女間に、死亡數法外に低かるべき

7) Cf. Towne, op. cit., pp. 373, 374.

を言明すと、實に數年に及ぶべき授乳、育兒に關する心掛けの周到等、母親たる者を尙早にして老けしむることあるべき特殊風習は、在留外人の子をも風化して之を幸福ならしむるものも存すべしと雖も、方今社會の一隅には、鬼婆の惡虐を伴へる里子^{サトリゴ}、有料子預り baby farming 子貰ひの報道、新聞紙上にその踵を接す、是れ果して何の兆にして、是を包める赤子死亡の統計果して何等の狀を呈する乎、人の子をして「子で子にあらぬ自らを此歲月の御養育」と想はしむるす如く仕向くるか、或は少年野球全國大會に始球を勤めて得々たり、baby farming 否酷評すれば baby beggar とすべきを寛假し、又「私生人口」の人材淘汰に冷淡なるは果して賢とすべきや、毛唐を眞似て學童給食問題を心配するの餘裕あらば、本邦子貰ひの弊匡救に深甚の注意拂はるべき筈ならすや、謂ふ莫れ、マツリゴトも亦分業なり、問注所、侍所別當、諸事奉行人の間に分業ありと、救貧、濟世又非違糾彈に當るべき局課は、表面的に獨立存在を有すべしと雖も、心身劣弱なる幼少兒女に對する體智德情育上、文教の府濟々たる諸賢良に何等活動すべきものなしと謂ふべけん哉、一國政治の統一を計るは、非常時に於て特に然りと考ふと雖も、教育行政の主旨を語るは吾人の任にあらず、從ひて吾人は上來説き來れる所を體しつつ、徐ろに研究の歩を進めんと欲す。

三

幼者特に赤子の死亡數前に一言せるが如く夥しきにより、推して知るべきが如く、相對的總死亡數は本來赤子死亡數により左右せらる、而して赤子死亡數そのものの多少は、出生數の多少に

繁れり、赤子又は醫事及統計の専門上普通に呼はるる如く、乳兒又は嬰兒の死亡數を、そのものとして考察せんとし最も普通に行はるる方法は、一歳未滿なる子の死亡數を、同一期間（通常曆年に就きて算定）の出生數と比較するにあり、そは一曆年内一歳未滿の死者が、尠からず前年内の出生者より生ずることを想へば、數學的には正當ならず、之を獨逸の經驗に徴するに、一歳未滿の死者中平均七二%は歿年内に、二八%は前年中に生れたる者なり、唯年々の出生數が大相違を示さずとせば、普通の計算法により足れりとすべきも、戰時諸年に見たるが如く出生數急減し、又大戰後の初年に見たるが如く急増する時は、その趣聊か之と異れり、普通の計算法によりては前の場合に過大の率を、後の場合に過小の率を生ずべし、之に似たる事例は全く別箇の理由により、米國乳兒死亡率の推移につき察し得べきは、後に説くべきが如し、而してその出生率の相違が、一八七〇及七一年の戰時に見たるが如く、さ迄大ならずとせんか、一曆年内一歳未滿の死亡數を同年及前年出生數の平均數に對比する方法により善處し得べきも、大戰により惹起されしが如き大相違を呈せし場合には、一層精密なる計算によるを可とす一九一六年分「獨逸統計央報」に一文 *Ernithung der Säuglingssterblichkeit in Kriegsjahren* を寄せし J. Raht が、一曆年内一歳未滿死亡の七二%は同曆年内の出生に、二八%は前年内の出生に歸すべしとせるは之がためなり、されど出生率の大變化ある際には、右七二對二八の比も亦變ず、この面倒を避くるため、此問題につきても死亡表作製に用ゐらるる方法を應用することとし、一歳未滿なる子の死亡律度を計算

することとなし得べきも、(一)年内一時點の人口年齡別材料と、同年中死亡年齡別の材料とを組合せ、一歳未満死亡歩合を察する方法は遙かに粗大なり、蓋し本邦にその例を見るが如く、年々十月一日の實査及推計人口年齡別によることとせんか、同年内それ迄に零乃至一歳にして死せるは、當然十月一日現在の零乃至一歳者中に含まれず、從ひて外觀上大なる率を生むべきや、昭和六年普通算法によれる乳兒死亡率一三・二なるに、この算法によれば二二・三を示す。第五十一回統計年鑑五一及五二頁参照) その死亡は二曆年に及ぼさるべく、一年内の幼者死亡數視すべき一計數あることなし、從ひて夏暑くして乳兒死亡に影響するあらは、實用のためにはその死亡律度を無用に歸せしむべしその間 T. Knöpfel の如き一九一九年 Hessen 國中央統計機關報中、前記論者と同一題目によれる一文中に於て、一方法を新選し、一九一五年に於ける一歳未満死者中、同年内に生れたる者を引抜き、その數を同年内の出生數に照して乳兒死亡百分比を算定し、同様に又その死者中一九一四年の出たるを、同年出にして同年を生殘し得たる者に照し、その乳兒死亡百分比を算定し、その兩比を合算すべしと提議したり、かかる加算は數學的に考へて素より許容さるべきことたらずるも、同様なる非難は普通算法による乳兒死亡率に就きて、等しく加へ得べき所なり、何れにしても Knöpfel の率は一樣によく實用に供し得べし、その外 Ralts 及 Knöpfel の兩方法によれる結果は、相互に大差を示すことなし、一九一五年 Hessen の乳兒死亡率は、前者の算法によらば一一・二一たるべく、後者の算法によらば一一・二五たるべきも、普通算法によれば一二・〇一たり、高死亡數の際にはその相違一層大なるべし。

普通算法によれる乳兒死亡率だけを考慮に入ることとしても、之が利用に就きては注意し

8) Cf. Bleicher, Statistik I, 1915 S. 123; F. Prinzing, Die Zukünftigen Aufgaben der Gesundheitsstatistik (Sozialhygienische Abhandlungen, hrsg. v. A. Fischer. I.) 1920 S. 33. 拙著論綱562頁以下

おくを可とすべきことあり、即ち第一にその率が精確なるためには、出生及死亡が等しき確實程度を備へて記録せらるゝとの假定成定つを要す、事實上原則として死亡は出生に比し一層確實に報告せらるゝ、年數を経るに定ひ出生中記録に載せらるゝ割合を遞増し、一面死亡の相對的頻繁度に變化なしとせんか、その國乳兒死亡率の減少は、現實の表明たらずして寧ろ唯外觀上然りとすべからん、その際分母の大きさは全部出生數の増加によるものたらずして、部分的には報告されたる出生の割合増加によるものなればなり、こは米國にその適例を發見する所たるや、後に尙再記すべし、第二に乳兒死亡計算上死産を如何に取扱ふかに付、諸國間に一致を缺く、本邦統計局の採れる所は多くの國に行はるゝか如く、二者別々に報告せられ、死亡率計算上死産を取入ることなきも、國によりては死産を出産中にも死亡中にも算入するあり、又英蘭にその例を見たるが如く、死産は全く登録されざるあり、而して同國出生の届出につきては六週の期間を認むるを以て出生後その期間内に死せる者にして、全く届出なき者多かるべきは推測し得べき所たり、かかる事情あるに拘はらず、同國が後に擧ぐべき計數上明かなるが如く、多年割合に低き乳兒死亡率を示しつつあるは、注目すべき點に一事由を加ふるものと謂ふべし、その外一般に統計作製の實際上出生と死産との區別につきては、諸國の材料を一様に信賴し得べしとするを得ず、奈翁法典 Code civil 行はるゝ諸國例令ば佛及白にありては、出産の届出に三日の期限を付す、かくてその出生者三日以内届出前に死せりとせば、佛國規定の下にては *présent sans vie* として記録され死

産に合算せらるかくて佛にてはその死産が死亡に算入を見さると共に、出生の数は引下げらるることとなり、従ひて又乳兒死亡の率を低下せしむ、學者の計算によればために約一%の低下を惹起すとせらる⁹⁾。

小兒死亡は古くより既に統計觀察の愛好物體となり、子の初生後第一ヶ月内は、第二ヶ月内に比し四倍の死亡あり、そは又第二及第三齡内の死亡數と殆んど同じとは、夙に學者の注目せる所なり、茄又は瓜なりせば徒花^{アタ}を見ると雖も、自然と觀して已みなん、人につき同一過程の目撃を迫らるるは、人情忍び難しとせざるを得ん哉¹⁰⁾、兎も角かかる事情あるを以て、乳兒死亡詳察のためには、更に一步を進め乳兒死亡數を出生後の生産月數否週數又日數に細分して計算するは、寧ろ普通なりと雖も、本編にありては一切之に觸れず。

四

肺結核は多く青春少壯前途有望の男女にその犠牲を求め、その年配以上の人々は脈管系統の病氣、特に心臟病、癌腫及神經病により往生の結果を惹起すること多きに反し、營養不足、麻疹、猩紅熱、實布的里亞、室扶斯、痢病等が、幼少生命の大敵たるは常人も亦辨ふる所なり、何れにしても悔り難き兒女多死は之がために惹起され、特に基礎及臨床醫學に秀でたる文明國獨逸に於てさへ、豫防醫事の實際に留意すること早くより深かりし英國に比し、夥しく多數なる乳兒死亡を生ぜしめ、恰も Schmöller をして、獨逸國民の汚點 Schandmal と呼ばしめし所なり。

9) Cf. Bailey, W. B. and John Cummings, Statistics. 1917 p. 84; G. Schnapper-Arndt, Sozialstatistik. 1908 SS. 186, 187; 拙著經濟眼 307以下

10) Cf. Haushofer, Bevölkerungslehre. 1904 S. 60.

諸國乳兒死亡率の概況に就き、出来る丈け最新の材料を捜すが如きは之を別人に委ね (A. Elster の前出著書三七四及三七五頁には、一九〇一乃至一九二一の各年次に就き、全獨乳兒死亡男女及嫡私出別、普國に關し一九一乃至一九一八の各年次に就き都鄙別の材料を掲げ、又 W. Winkler, Art. „Sterblichkeitsstatistik“ im Hdw. d. Staatswissenschaften, 4. A. VII. Bd. 1926 S. 1025 には一八七一乃至一九二四の各年全獨乳兒死亡率を、同一〇二六頁には獨逸内諸國別一九二一年の乳兒死亡嫡私出別を、更に次の頁にはその料を主として一九二四年に採れる諸國別乳兒死亡を表示せり、尤も最後の表中本邦材料を含まず) その梗概を瞥見するの趣旨により、主として O. Most の一著中摘録せる所を引かんか、「遍く行きて香を求むるも、不死の家有ることなし」。一歳の子を得て「老に備へしに今や吾を捨てて死す」(雜譬喻經)との歎あらしむべき乳兒死亡の率は、出生每百中諾威七(約五、和蘭及濠洲之と相如く、因云、括弧内の計數は前掲書再版收録の分なり、以下同)瑞典七(六)愛蘭九、丁抹一〇(八)英蘭一一(七)蘇格蘭一一(一〇)和蘭一一(前掲)瑞西一一(七)白一四(一一)佛一四(佛及自由國 Iettland 九)塞耳比亞一四、勃牙利一五(一一)伊一六(一六別言すれば約六分の二)西班牙一六(一四)獨一六(一一)ルクセムブルヒ一七、洪牙利一九(一九)ルーマニア二〇(二二)埃二二(一六)露二七(芬蘭二〇)北米合衆國七)なり、(Meyers Kleines Lexikon, 8. A. I. 1931 S. 307 によると、一九二七年諸國中にて少率なるは、瑞西五・七、和蘭五・九、瑞典六・二、英威七・〇、諾威一九二六年四・八たり) Wagner は此事實に向ひ、他の各齡級に比し乳兒死亡率高きは、自然に外ならざらんとせるも、右計數系列の末に近き諸計數にありては、無駄なる經費、徒爾なる悲哀及心配、稚き命の仇なる氾濫法外に夥しく現はれ、かくて人命の猛烈なる荒廢あり

11) Cf. Most, Bevölkerungswissenschaft. 1913 S. 73; Ditto, 2. A. 1927 S. 69.

と謂ふの外なし。かく観すると共に想ひ合はすは四隣にお構ひなき無線放話が、野卑なる鄭聲により佚樂を播き散らしつつ、俗惡なるトーカーと相待ち、無邪氣なる四海出藍の子を、荼毒しつつあるもの全然なしとすべきやを疑はしむることなりと雖も、子の死亡につき唯一つ悦ぶべきは最近數十年間大戰前特に又大戰後に於ても、殆んど一切の開化國に於て起れる著大の改良にあり、こは特に獨逸につきて適切なり、即ち乳兒愛護に付定案によれる宣傳及實際策により、既に大事蹟を舉げ、又更に進みて舉げんとす、その推移の民文的意義は、恰も吾人が本論の主眼視する所たるは後に明かにすべきが如し。而して又此點と關聯して先づ諸國別計數材料に徴し、東歐諸國に於けるが如く、大體に高死亡率を併へる高出生率により注目を惹ける諸國は、如何なる程度迄その高乳兒死亡率により傑出すべく、獨逸國內にては特に巴威里が古くより高率を示せるや異とすべきを明かにするは大に意義ありと雖も、少くとも歐洲諸國に關する限りに於ては、大戰による諸國領土の變更、群小國の新興等に深甚の注意を拂ふの要あるを以て、今一切之を略して後日の述作に譲る。

本邦乳兒死亡に關し、「明治四三年は出生百に付一六・一を示し、爾後逐次減少して一五・二となりしが、（因云、明治一九乃至二三同二三乃至二八の毎五年年平均上、それそれ一一・七及一四・七の低率を示すは、明治三〇年代の初め以來に於ける、出生の統計作製法上の重大なる變更前なることと、關係淺からざるべし）翌三年よりは逐年増加し、殊に大正七年に於て大に増加して、一八・九を示すに至りたり」翌八年は大に減少して

一七・〇となりしも尙高率たるを失はざるは、大正二年の一五・二より漸増の傾向を辿れるの餘波視すべきものも存すべしと雖もそれは主として右兩年次に於ける流行性感冒に基因するものの如しとは、故濱田富吉氏執筆「大正八年日本帝國人口動態統計記述編」(三三頁)中に説く所なり、爾來歲により多少の高低を伴ふも、大體遞減の傾向にあり、昭和五年の如きは一二・四を示し、過去二三ヶ年間に未だ曾て見ざる低率となれるも、之を前掲諸低率國の近況に對照する時は、その率の高さよりするもその變動の趣よりするも、晏如たり得ざるを覺ゆ(尙衛生局年報昭和五年一〇八頁參照)今右の趣旨を明確ならしむるため、前掲「記述編」同昭和五年分及第五十一回年鑑より左の一表を摘録す。(前記衛生局年報一〇六及一〇七頁には明治一九乃至昭和五の四十五年に亘り累年及毎五ヶ年年平均乳兒死亡率を示す近年に就きては統計局の材料を利用せりと想はる)

出生 毎百に付一歳未満死亡

明治四三(一九一〇)年	大正一〇(一九二一)年	昭和元(一九二六)年
四四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
大正元(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
二九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
三九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
四九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
五九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
六九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
七九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
八九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九一(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九二(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九三(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九四(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九五(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九六(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九七(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九八(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
九九(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇
一〇〇(一)〇	一一(二)〇	一一(二)〇

米人はその聰明及開化を凡てに誇らんとするに拘はらず、米國一九一〇年代通有なりし諸事情によれば、年々二四乃至二八萬の乳兒死亡を出し、世の耳目を聳動せしめたり、こは前にも説ける如く、人口動態統計作製の基本たる身分登録制に、適當なる全國的組織を缺き、特に出生統計に脱漏多きによるもの淺からず、現に蒐集されたる殆んど一切の資料に於て、「概略」^{アツプロキシメーター}と附記せらる、されば米國に遊びてその統計行政を視察せる統計學者中、明かに之を指摘せる者尠からず、その一例として吾人が先づ舉げんと欲するは多年英國商務省統計部長として令名ありし Giffen (一八三七—一九一〇、一八九七年退職) なり、即ち氏自ら語る所によると、米國 Philadelphia 市に於て、市當局の年報中出生に對し死亡超過を示すを見て一驚を喫し、その内情を深く穿鑿せるに、刊行物に示されたる死亡超過は、主として出生其のものが、充分に記録されざるによるものたることを發見せりと説けり、即ち醫師の附添へる出生は記録さるるも、産婆のみ附添へる出生は毫も記録されず、從ひて全記録は不完全なりきとせり、¹²⁾又現代英國有數の人口及衛生統計學者たる Newsholme は、米國二都市の乳兒死亡を比較して、「比較適性なき計數材料比較」 Comparison of incomparable Data の一例に供したり、謂ふ所必ずしも同國死亡統計の信賴價值を疑へるに非ずと雖も、同國に於ける近年乳兒死亡率低下の一端を窺はしむると共に、同國の同種材料利用上參酌の料とすべき價值多きを以て、先づ之を紹介せんか、一九一七年乳兒死亡率は出生千に付、紐育市八九、華盛東、Washington, D. C. 九七たりき、(一九三〇年に於ける同種比率東京市九

12) Cf. Towne, op. cit., pp. 371, 372.

13) Cf. Giffen, Statistics. 1913 p. 54.

○、京都市一二八、大阪市一二九、名古屋市一三〇なるを注意す）著者は右二計數に比較適性あるかと自問しおきつつ、説明せる所によるに乳兒死亡は黒人間にては、白人の家族間に比し高きは有名なり、右二都市間に於ける相違の真相は次表之を明かにす。

	出 生 數		一歳未満死亡		出生千に付死亡率	
	白人	有色	白人	有色	白人	有色
紐 育 市	一三八、二三一	三、〇〇三	一二、〇三九	五二九	八七	一七〇
華 盛 東 市	五、二五〇	二、二三五	三七二	三五七	七一	一六〇
						九七
						通 算

表による乳兒死亡率は白色及有色乳兒の二者中俱に華盛東にては、紐育に於けるより高し然るに皮色を問はずして通算せる率はその逆なり、市總人口中黒人を含む割合、兩市の間に相違あるの結果に外ならず、次に尙同學者が米國乳兒死亡及出生統計に付、評せる所を紹介せんか、就中乳兒死亡統計は the Bureau of the Census *U.S. & Mortality Statistics* を離れて一別冊として Birth Statistics for the Birth Registration Area of the U. S. と題せるものの中に發表せらる、一九二〇年分はその第六年報なり、同年報中出生登簿區域に就き出生千に付ての乳兒死亡率を示し、更に出生後三日以内、次の三日以内死亡の計數を細別し、又出生後初月内各週死亡、三ヶ月別に分ちたる乳兒死亡を彙類して表示せり、而して出生記録の不完全に伴ふ可能誤謬に關し、説く所によるに出生登録制を有する諸州にても、一部の州にては完全に勵行されず、*Howe I. Dublin* の一論文 *The Present Status of Birth Registration etc. Quarterly Publication of the Amer. St.*

Assoc., 1917. に擧げたる諸事實により例證せらる、即ち論者は出生記録確實及完全の程度を驗めずの三視矩を考察し、その第一規矩として、人口實査の當年内に於て一州内にて記録されたる出生數は、靜態實査上一歳未滿の現存乳兒數として、計上されしものに比し大なるべき筈なりとし、(前記乳兒死亡率率算法の説明中、本邦同種材料に就き説ける所参照) 諸州に付然るや否やを調査し、その結果を右論文中に發表し出生記録の不確實を裏書したりとせり、¹⁴⁾ 實に米國行政統計特に人口動態統計に就き、讚稱すべき長所ありとせば、それは計數及記録の詳實に非ずして、その詳實を粧ふべき諸推算の巧妙なる利用にありとこそ謂ふべけれ、統計學を定義するに當り、諸學者とその選を異にし、推算利用に重きをおかんとせる W. I. King を生めるも之がためなるべし、人道の一愛護者として敬慕すべく、勞働統計を考案又編成しては之が世界的先驅者となり、又その業績により米聯合政府の閣議に列するの光榮さへ擔ひ得たる C. D. Wright の「實際社會學概論中」、少年勞働、虐待防止、少年感化問題を問へるも、乳兒死亡を詳説せず、一般に人口動態の材料利用に疎なるは一は時勢のためなるとしと雖も(同書初版は一八九九年に出づ) 前記統計不備の事情と關聯する所全く存せずとするを得んや、そは兎も角前記米國乳兒死亡及防衛會は極めて周到なる推算を遂げ、信頼すべき資料として利用し得べきを編修したり、同協會は二四萬人の子が年々北米合衆國に於て一歳未滿にて死すと見積れり Report on National Vitality, its Wastes & Conservation (大正四年内田嘉吉譯國民保健論あり) の報告者 Irving Fisher は言へり、「是等の死中尠くとも一二五千人は、現今知

14) Cf. Newsholme, Vital Statistics. 1923 pp. 345, 341, 342, 74.

曉せらるる如き輓近衛生が、一般に實行されたりとせば、必然起らざるを得たらん」と、一歳未満にして死する子數前記の如く多きは、合衆國總死亡數の約五分の一を占むることたり、そは子七人中尠くとも一人が一歳後の誕生を祝ふ以前に死することを意味す、然るに前記の如く乳兒救護事業米國にも振興せられてより、面目を新たにせるものあるに似たり、その概況を窺ふに、Philadelphia 市中特別の防衛事業實行されし地區にありては、その乳兒死率市の他地域に於けるより四〇%低し、Baltimore の給乳所 the Babies' Milk Dispensary により牛乳を供給せらるる乳兒間の死率は同市の乳兒間に於ける普通死率に比し五〇%低し、紐育市は一九一〇年代の中頃をその二十年前に比するに、¹⁵⁾その間人口及生計費が急に増したる年代たるに拘はらず、年々死する乳兒平均二千人は尠しと謂ふ、宣傳の裏には兎角虛妄を潜ましむ、上報を以て一片の宣傳視するは輕率の譏りあるべきと共に、本源報告を吟味しその計數價值を批判せる上ならでは、俄かに輕信し難きを想ふと雖も、大勞か改良に向ひつつあるや察するに足れり。(未完)

15) Cf. Towne, op. cit. pp. 371, 372, 374. 拙著論綱421頁以下